紹

國學院大學研究開発推進センター

『史料から見た神道 |國學院大學の学術資産を中心に||

弘文堂 平成二十一年三月 A 5 判 三六五頁 本体五六〇〇円



産を用いて神道研究を進め、 に―』刊行に寄せて」)。そのような学術資産のうち、 蔵してきたが、「それを「学術資産」として保存・利用 ると言えよう。 術資産を豊富に所蔵する國學院大學ならではの企画であ けて発信しようというユニークな試みである。 ターの思いから本書は生まれている。大学所蔵の学術資 広く社会に向けて発信しようという、 わけ神道関係の文献資料に注目して、 うかとなると、いささか心許ない気がしないではない」 し、その価値や存在意義を社会に向けて問うてきたかど 大學では、 、阪本是丸「『史料から見た神道─國學院大學の学術資産を中心 版物に関する 明治十五年に創立された皇典講究所に淵源する國 創立以来、豊富かつ多種多様な学術資産を所 本書は、 考察」をはじめとする三部十一 阪本是丸氏の「皇典講究所関係 その学術的意義を社会に向 その学術的意義を 研究開発推進セン これも学 編 とり の論 學院

浪)、 神道 れ 紀 宣布運動関係資料 山)、常世長胤関係資料を中心とした國學院大學の大教 思想」では、 が収録されている。 村)、八田知紀の尊皇思想と学問観 鈴木重胤・岡熊臣・敷田年治・ 第二部「国学者の神理解」では、 真言神道の伝授 茂別雷神社の御読経供僧 ある論文であり、 の学術資産を知る上でも有益な一冊となっている。 宝鏡開始章の解釈 かつ関係資料が翻刻されている。 岩崎長世の神葬祭研究 神社」 戦後の國學院大學と教派神道との関係 では、『本朝寺社物語』 (大東) といった問題が扱われてい (藤田)、 國學院大學に所蔵されている神道 第三部 (中野)、 神道事務局の設立と制度 (太田)、 (星野) 「近代神道をめぐる制度と 大国隆正の神典研究 飯田武郷に見る『日本書 前記阪本論文のほか、 といった問題が扱 (宮本)を扱った論文 日御碕神社における の成立 いずれも読み応え (新井)、

考から構成されている

(以下敬称略)。第一部

「中近世の

係 0

紹

小堀桂

郎著

『なぜ日本人は神社にお参りするのか』

海竜社 平成二十一 年五. 月 B 6 判 二九〇頁 本体一六〇〇円

お神日参加本人 小堀桂一郎

海竜社

灼 な神社」のことを今風に言い替えただけであり、日 ^{*ge *k} 境内に集中している。要するに昔よく言われた「霊験 た『十七條憲法』―」では、 を征服し制御すべきものと変わっていった事を指摘する り西欧では自然に対する畏れや慎みが薄れ、 發した日本人と神との長い歴史」と明記された通り、 本人の宗教心の基層は昔も今も変わっていないのである。 同じであることを説かれ、 として、宗教を指す単語の religion が、ラテン語の religio 流行している。 のような日本人の宗教心意を明快に説明されてい (畏れ、慎み)から起因し、 第二部 著者が本書の帯に「´聖なるもの、への畏敬の念から 最近「パワースポット」なるものが老若男女を問 本書は第一部 「聖德太子の説かれた『公と私』 そしてその多くの場所が神社 「日本人と神―『聖なるもの』への畏敬―」 我国の国体論は江戸時代に水 これは古代日本人の宗教心と しかもキリスト教の布教によ 人間が自然 (仏閣 』を創 わ ず 0

る必携の書である。

の人たちがお参りするのか、

日本人の宗教心意を探求す

戦後GHQ政策「神道指令」があっても、なぜ今も多く

の思考を考察する大きな手がかりとなる。 にも拘わらず、それに限ってそれを強く主張する反対派 には仏教的「怨親平等」観を一つも持ち合わせていない る上で、実に示唆に富んだ内容となってい 觀を超えて―」では靖國神社をめぐる今日の状況を考え 値を見出した人が少なくないことを指摘している 使であったポール・クローデルのように神道に注目し リスト教を奉ずる西欧知識人の中にも、駐日フランス大 『在るべき様』は?―國民宗教としての自然信仰―」では、 代に既に確立していたことを述べ、第三部の「日本人の 戸学によって完成されたが、 さらに第四部 | 守護神としての靖國の神— 『怨親平等 日本人にとって神とはどのような存在なのか、 原理としては聖徳太子の る。 靖國神社 そして 価 時

佐々木聖使著

介

紹

『天皇霊と皇位継承儀礼』

新 人物往来社 平 成二十二年二月 四六判 二三九頁 本体二八〇〇円

否の思想の上に構築されている」ことを指摘した あった。本書は、この折口「天皇霊」 後、 礼の秘儀を解き明かす新たな視点を導入した。 に典拠をもつ「天皇霊」という用語を用い、 なる意味をもっていたのかを検証し、 研究のように「大嘗祭の本義」のみを対象にすることの 的研究である。佐々木氏はまず、折口当人においてさえ、 て、学際的な視点を取り入れて論じた「天皇霊」の総合 危険性を指摘する。そして彼にとって「天皇霊」 「天皇霊」の概念が一定していないことを述べ、 一天皇をして天皇たらしめる根源的なミタマが、 折 「天皇霊」は宙に浮いたまま取り残されてきた感が 折口の大嘗祭論に対して賛否両論が展開されるなか \Box つい 信夫は で 『日本書紀』 大嘗祭の本義」 において「天皇霊」とい におい その最大の特色が 論の是非につい て、 皇位継承儀 日本書 しかし戦 血縁拒 がい 従来の ・う用 紀

「本来、

霊

神の依代」であり、「祖神のミタマノフユ」たる「「天皇 霊と神器の継承について論じられる。「三種の神器 威」でもあった(第二章)。最後の点を受けて、 皇においては祖神の霊威、 関係もないことを明らかにする。『日本書紀』の が折口のいう意味では用いられておらず、 んでいる。また「天皇霊」は「武具に憑いて発動する武 が降臨する祭具」であった。こうしてたどり着い は、天皇・皇族・臣下でそれぞれ異なっており、 祖霊祭祀のための呪器」であった。それは 皇族においてはそれら両方の観念・用法を含 臣下においては天皇のもつ威 大嘗祭と何 次に天皇 「天皇

霊や稜威、

が定位されてきた」ことに求めている (第三章)。 て皇位継承儀礼の意味を「血と器と魂の上にのみ、 の継承によってこそ付与されるというものである。 のではなく、むしろ「三種の神器」の承継による祭祀権 本書の結論は、「天皇霊」は大嘗祭において付与され

語がいかなる意味で用いられているのかを検証し、

それ

紹

或 [學院大學研究開発推進センター

霊 魂 慰 霊 顕彰

死者への記憶装置―

錦正社 平 成二十二年三月 A 5 判 三五 二頁 本 体三 几 \bigcirc ŏ



究会) 霊」をめぐって―」で、古代・中世を中心に死者を供養 成されている。 式 藤 開催 た今井昭彦氏の各報告、 長州桜山招魂場形成の経緯とその歴史的背景を論じた武 して神として祀る形態を幅広い視点で論じた山 に続く、 二月と翌年二月に開催されたシンポジウムの記録、 慰霊と顕彰の間 招魂と慰霊の系譜に関する基礎的 つは、 秀章氏、 田大誠氏の論文 威 明治前期に 學院大學研究開発推進センター は 二冊 「日本における霊魂観の変遷― その研究成果を内外に公表してきた。本書は 計三十回にも及ぶ研究会・シンポジウム等を 長州と相対する会津藩での戦 目の成果論集である。 本書の大半を占めるシンポジウム記録 おける招魂祭の展開を中心に―」より構 近現代日本の戦死者観をめぐって― 戦死者の慰霊 それに三土修平 ・追悼・ 内容は、 ?研究」 0) 研 死者祭祀 一怨霊」 究事業であ 顕彰と神仏面 中 (慰霊と追悼 平成二十年 Щ 郁 田雄司氏 <u>ک</u> 心を論り 両 また 氏 英 0

百

文は、 えるであろう。 ている。これが なシンポジウム記録とは異なる、 告は「論文」形式で提示され、 が収録されてい そして高木博志・ 災害による死者の 羽賀祥二氏は、 史氏は、 例に慰霊・追悼・顕彰の 会―」である。 本における慰霊・ コメントと全員の討議を収録する。 って検証 0 招 現祭」 幕末維新期から明治前期を対象に、 金沢を事例に軍 円 した力篇である。 に注 最後に る。 菅浩二氏 同研究事業の成果論集の特色 追悼・ 目 大原康男両氏のコメントと全員の 八九〇年代 〈慰霊〉と 前 「付論」として収録され П は、 顕彰の その 都 同 〈場〉 様 0 歴史的展開を広く詳細 栃木県と台湾の招魂社を事 0 〈供養〉 往々にして見られるよう 東海地 ||慰霊空間| としての神社を、 13 場》 ずれもパネリ ユニークな構成になっ もう一つは 方に のあり方を論じた 戦死者と地域 特に と国民統合を おける戦争 0) た藤 ストの 「近代」 本康宏 神仏合 0 討議 袓 H

紹

神社新報社

皇學館大学編

(神社新報ブックス15)

『日本人として。 皇学』

平成二十二年三月

れぞれ「皇学」と「伊勢学」に改め、教養教育の再編成

た「日本学」(春学期)と「地域文化論」(秋学期)を、そ

皇學館大学は新入生の必修科目であ

新書判 一四七頁 本体一〇〇〇円

あり、 家に対する意識を考察する「日本人として。守るもの」、 らは、オムニバス形式で行われた講義内容を各章のテー と誇り、の学問」を第一章として、本居宣長からみる自 を行った。本書は平成二十年八月から同二十一年四月迄、 国に対する意識や信念、また自国への感謝と報恩につい たものである。 神社新報で連載された「皇学」の講義の要約を再編集し て述べ、「皇学」とは日本への愛と誇りを与える学問で 人物である松浦光修教授の講義をまとめた「皇学― 本文は五章構成であり、始めに、 それを学ぶことの重要性を提言している。二章か 仰ぐもの」、 日本の信仰について述べた 国体思想を中 教養教育再編の中心 心に国土国



に」では、「皇学」の前提や背景を整える為のこれから 学の精神の基本」に沿った内容である。また、「おわり 発を果たした「皇学」という学問の、今後の発展が期待 新たな学問の重要性を提示している。教養教育として出 の課題として、「日本」という文明の特徴を客観視する、 伝統・文化を尊ぶ心を育む」という、皇學館大学の「建 として。誇るもの」と続く。いずれも「神道を基盤とし 術など将来に伝えるべき伝統についてまとめた「日本人 た「日本人として。伝えるもの」、母国の言語や文化芸 戦後教育から環境、 皇室や神宮を崇め、祖先を敬い、国を愛し、歴史・ 国際社会における将来について述べ

理解しやすく、端的にまとめられている。「皇学」、 したい一冊である。 は神道に関する書籍を初めて手に取る読者にもお薦め 新入生を対象とした講義の要約であることから内容は

> 529 紹 介

紹

岩波書店

島薗進

著

(岩波新書

当家申首と言

国家神道と日本人』

平成二十二年七月 新書判 二三七頁 本体八〇〇円



して、 重なり までの時期を、 校教育・教育勅語を中心に焦点を当て今までの国家神道 来おおまかに過ぎていた日本人論・日本文化論と相対化 られている」と指摘するとおり、 かし、 以来、 研究とは違った観点で国家神道を解明しようと試みる。 的確な理解に近づこうとする。特に大日本帝国憲法・学 を解明する鍵として「国家神道とは何か」を究明し、従 れた国家神道に対し疑問を呈する人が多い 著者は宗教史学の立場から近代日本の宗教史・精神史 村上重良氏が昭和四十五年に 本書では先ず第一章で、 合い 日本の文化史・思想史や日本宗教史についてより 島薗氏が本書で「戦時中の国家神道の像にひきず 戦後の国家神道研究の第一人者とみなされた。 ながら棲み分ける宗教地形 国家神道とその他の宗教や精神文化とが 明治維新から大東亜戦争終了 『国家神道』を刊行して 今日では村上氏の説か (世界観構造

> 形成してきたことを論じる。 思想の存在が、二重構造の下で物事を考え、生活秩序をる国家神道と、それぞれの人々が信奉する多様な宗教や

「国家神道とは何か」を再考している。用語の意義が混乱していた為に、その混乱の由来を考え―用語法―」では、タイトルの通り「国家神道」という―知語法―」では、タイトルの通り「国家神道」という第二章の「国家神道はどのように捉えられてきたか?

家神道は解体したのかを、あらためて問いただしている。 方領軍によるGHQ政策「神道指令」によって本当に国立が柱の一つとされた経緯について説明。 中心の国家理念の過程をたどり、続く第五章で、戦後の中心の国家理念の過程をたどり、続く第五章で、戦後の中心の国家理念の過程をたどり、続く第五章で、戦後の中心の国家理念の過程をたどり、続く第三章では、国民の力を結集して西欧諸国に対抗

す一冊である。

従来の国

一家神道研究に捉われず、

違った観点で見つめ直

形成されていたことを説かれ、

国民の間で広く共有され